

# 平成28年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成28年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

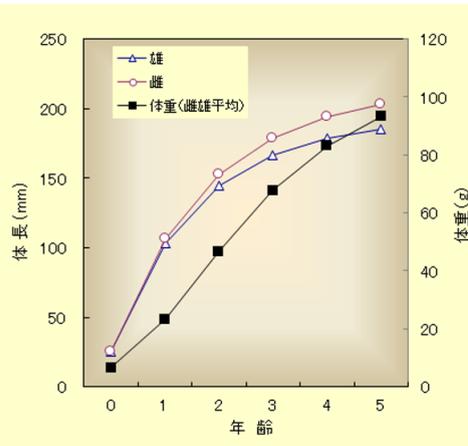
系群名 日本海西部系群

担当水研 日本海区水産研究所



## 生物学的特性

寿命： 5歳（年齢および年級はふ化した年を起算年として表記）  
成熟開始年齢： 雄：1歳（50%）、2歳（100%）、雌：2歳（100%）  
産卵期・産卵場： 12月、秋田県沿岸、朝鮮半島東岸  
食性： 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類  
捕食者： マダラ、アカガレイ

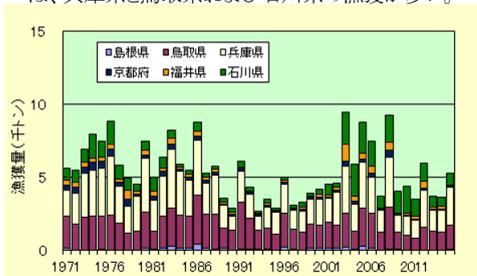


## 漁業の特徴

本系群は能登半島以西の日本海西部に分布し漁獲対象となるものであり、兵庫県と鳥取県では沖合底びき網1そうびき(以下、沖底)、石川県～京都府および島根県では小型底びき網によって主に漁獲される。漁期の中心は3～5月である。なお、2009年以降、1歳魚が多く混じると水揚げが控えられている可能性がある。

## 漁獲の動向

漁獲量は、1970年代から1980年代半ばには8,000トンに達する年もあったが、1980年代後半に減少し、1990年代は5,000トンを下回る年が多くなった。1990年代後半から増加し、2003年に過去最高(9,500トン)となった。その後、1～2年ごとに増減を繰り返していたが、2009年からは4,000トン前後で推移し、2015年は5,307トンであった。府県別では、兵庫県と鳥取県および石川県の漁獲が多い。



## 資源評価法

最も長期データのある沖底の資源密度指数に基づき、資源水準を判断した。その際、本種特有の数年ごとの半減・倍増の影響を取り除く目的で、3年の平均値(当年、前年、前々年の平均)を用いた。また、動向については、2009年前後に漁獲状況が変化した(1歳魚の獲り控え)可能性があり、日本海西部の水深190～550mにおいて5～6月に実施されたトロール調査結果から面積密度法を用いて推定した資源量により判断した。

## 資源状態

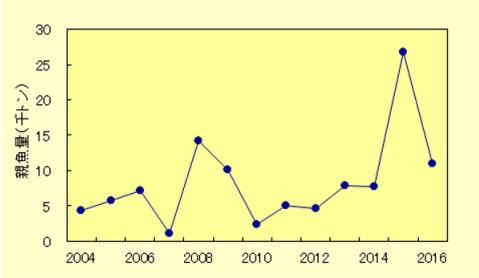
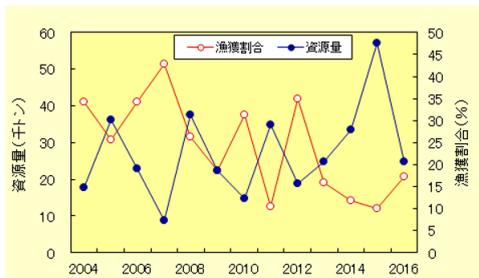
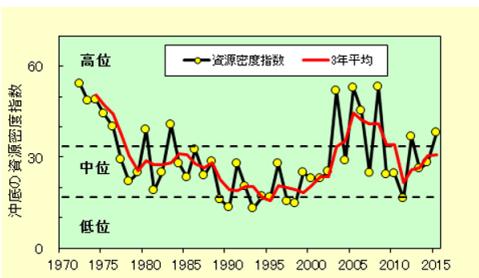
沖底の資源密度指数は、1970年代前半に最高、1990年代前半に最低となった。1994年から漸増傾向に転じ、2002年以降は大きく増減しながら20～50前後で推移し、2015年は38.0であった。資源密度指数の3年平均の最高値(50.6)を3等分し、高位と中位の境を33.7、中位と低位の境を16.9とした。2013～2015年の平均は30.8であり、水準は中位と判断した。トロール調査結果より推定した資源量は9,000～5.7万トンまで大きく変動している。資源量と資源密度指数の推移が異なるのは2009年に始まった1歳魚保護の取り組みによると推察される。2012年の資源量は1.9万トンであったが2015年には5.7万トンとなった。2016年は2012～2014年の平均と同等の2.5万トンであった。トロール調査結果に基づく資源量の直近5年(2012～2016年)の推移から動向は横ばいと判断した。なお、親魚量は1,159～2.7万トンで推移し、2016年は1.10万トンであった。



動向 水準

横ばい 高位

低位



**管理方策**

現状の漁獲係数( $F_{current}=0.14$ )は、親魚量を維持する漁獲係数( $F_{med}=0.18$ )より低いため、現状の漁獲圧による漁獲を継続しても、資源量、親魚量ともに維持される。このため、現状の漁獲圧を維持しながら資源を有効利用することを管理目標として、2017年ABCを算定した。1歳魚を保護して2歳以上になってから漁獲する方が経済効率は高くなることから、今後も網目拡大の取り組みは続け、経済効率の高い2歳魚主体に漁獲することが重要である。

| 管理基準               | Target/Limit | F値   | 漁獲割合 (%) | 2017年ABC (百トン) | Blimit=      |
|--------------------|--------------|------|----------|----------------|--------------|
|                    |              |      |          |                | 親魚量5年後 (百トン) |
| 1.0・ $F_{current}$ | Target       | 0.11 | 11       | 45             | 158          |
|                    | Limit        | 0.14 | 13       | 56             | 142          |

- ABC算定の規則の1-3)-(2)を用いた
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルのF値による漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の維持が期待されるF値による漁獲量。 $F_{target} = \alpha \cdot F_{limit}$ とし、係数 $\alpha$ には標準値0.8を用いた
- 2016年の親魚量(予測値を含む)は1.10万トン
- $F_{limit}$ は現状の漁獲係数( $F_{current}$ )に $\beta_1$ を乗じることとし、 $\beta_1$ を1.0とした
- $F_{current}$ は2014～2016年のFの平均値
- 漁獲割合は2017年のABC/資源量
- ABCは十の位を四捨五入した

**資源評価のまとめ**

- 資源水準は中位、動向は横ばい
- 資源量は、2012年以降1.9万～5.7万トンで推移し、2016年は5.6万トンであった

**管理方策のまとめ**

- 現状の漁獲圧で、資源量と親魚量は、現状を維持することが予想される
- 現状の漁獲圧を維持しながら資源を有効利用することを管理目標として、2017年ABCを算定した

執筆者: 藤原邦浩・上田祐司・佐久間啓・松倉隆一・山本岳男・山田達哉

資源評価は毎年更新されます。